

文語歌曲 椰子の實 國民歌謠

椰子の實

作詞…島崎藤村

作曲…大中寅二

谷田貝常夫

名も知らぬ 遠き島より／流れ寄る 椰子の實一つ

故郷の岸を 離れて／汝はそも 波に幾月

舊の木は 生ひや茂れる／枝はなほ 影をやなせる

＊「生ひや茂れる」の「や」は疑問の助詞。生ひ茂つてゐるのだらうか。

＊「影をやなせる」の「や」も疑問の助詞。影をなしてゐようか。

われもまた 渚を枕／孤身の 浮寝の旅ぞ

實をとりて 胸にあつれば／新なり 流離の憂

＊「胸にあつれば」は、胸に當てると、の意。

海の日の 沈むを見れば／激り落つ 異郷の涙

思ひやる 八重の汐々／いづれの日にか 國に歸らむ

＊「いづれの日にか 國に歸らむ」の詩想は明治の詩人によく用ゐられたもので、

「か」

は疑問、「む」は推量の助詞とされ、「いつ故郷に歸られようか」と譯されますが、

「いつか 歸らむ」とする意思も強く感じられる語法です。

この歌、『遠野物語』などにて知らるる民俗學者の柳田國男が、病氣豫後の療養のため三河（愛知縣）の伊良湖畔に滞在せる折、海岸にて流れつきし椰子の實を拾ひたり。そが體驗を東京に戻りて友人なる島崎藤村に語りたる所、藤村、その話、いただきませうと言ひて早速、この歌の作詞をなせり。されどその詞想はひとの調べしところによれば、森鷗外に傾倒せる藤村なれば、森鷗外が譯せし『於母影』に得ること多く、この歌にてはカール・ボエルマンが作「思郷」の漢詩譯を腦裏に描きてのこととせらる。藤村は山國、信州馬籠の生まれ、さすれば「われもまた」なる八重の汐々の先にある故郷は、椰子のものにて、詩のうへのところなり。

この伊良湖畔の沖に神島あり。この都會の影響を少しも受けざりし環境に、日本の古代、古代ギリシャを重ね合はせて、純なる戀愛小説を書きたるが三島由紀夫の小説「潮騒」なり。

この題名、すでに萬葉集にも詠まれたる柿本人麻呂の一首「潮騒に伊良虞の島邊漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き島廻を」をも包みたるがごとし。

西行も、伊勢に住む以前より幾たびか伊良湖を訪なひての歌あり。この地、鷹渡りにて名あれば、二羽の鷹の伊良胡渡りを觀察せる歌なり。「巢鷹わたる伊良胡が埼を疑ひてなほ木に歸る山歸りかな」この歌ちと複雑にて、一羽は伊良胡渡りに海を渡りたるが、一羽は海を渡るに氣後れし、元の木に戻りたりとす。この山歸りの鷹、己が出家したるあとの、若きときの己が姿と重ねたるか。

西行より五百年近くを隔て、後の芭蕉、西行を敬慕せるが、伊良湖を訪れたる經緯は門弟の杜國とのかはりに因る。貞享元年（一六八四）名古屋にて作られたる連句集「冬の日」の連衆に加はりたる杜國との別れに芭蕉、「ひなげしに羽もぐ蝶の形見かな」なるつよき思ひ入れの句を披露す。杜國は若くして豪商、しかも尾張俳諧の重鎮なりしが、「冬の日」の翌年、空米賣買の嫌疑にて家財沒收、所拂ひ

の身となりて伊良湖近くに隠棲することとなりたり。二年後芭蕉は、「冬の日や馬上にこほる影法師」なる句を詠むほどの寒き真冬に、寄り道となる杜國が閑居を門人と共にたづねたり。そこより伊良湖に行きて詠みたるが、再會の喜びと、西行を意識したる句「鷹ひとつ見つけてうれし伊良湖埼」なり。その翌年、杜國は芭蕉の誘ひに伊勢にて落ち合ひ、吉野の花、高野山、須磨明石の月を愛でて吟行する「笈の小文」をものせり。

この伊良湖の地、萬葉集にては麻績王、江戸時代にては渡辺崋山、杜國などの生涯最後の流謫地るたくなる一方、鷹など鳥類、あさぎまたら等蝶類の渡海出發の地にてもあり、椰子の實のなる遠き島めざして飛ぶ。自然のめぐりの、なんと大きなことよ。

(平成三十年十月二十五日受附)